
学校一の美男美女

神崎 奈哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校一の美男美女

【Nコード】

N0233D

【作者名】

神崎 奈哉

【あらすじ】

学校一の美男美女と賞される、相原仁希と成瀬秋。彼等が恋人同士となるまでの短いラブストーリー、のつもり。

（前書き）

初めて書いた恋愛小説です。広い心でお読みになってください。

11月の半ば。

暦の上では冬になり、寒さが一層厳しくなってきた。吹く風も冷たく、秋の名残りが一切なく、冬の到来という感じた。

この物語の主人公兼ヒロインは、成瀬 秋^{しゅう}。男^{おとこ}っぽい名前がコンプレックスの乙女。18歳、華の高校3年生。

ドンッ

「うわっ！って秋かよ…危ねーだろ？」

「いったー仁希、ちゃんと前見て歩いてよ！」

秋がぶつかかった相手は、相原 仁希^{よしき}。軽口ばかり叩くが、実のところ彼は秋の好きな人である。

また、容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能の完璧男。難点は、口が悪いこと。

「はあ？ぶつかってきたのそっちだろ。」

「被害者は私ですー女の子の方が弱いのに！」

「え、秋が女？妙に男っぽい名前じゃね？」

しかし、この2人。顔を合わせたら喧嘩ばかり。一般的にいう、喧

嘩するほど仲が良いというヤツだ。

仁希も他の女には、そっけないのに、秋だけはよく絡む。

「うるさいわね！」

書き忘れていたが、秋もかなりの美人さんで、狙う男は数知れず。仁希が秋を女扱いしないのを、そして男前な仁希を、快く思っていない連中は多くいる。

「成瀬さん。相原なんかと話してないで、こっちで俺と楽しくお喋りしよーよ。」

「お断りするわ。私、用事があるの。じゃ。」

秋に話かけてきたのは、仁希に続いてかなりモテる、遠峰 稜。秋の事が好きなのは周囲にバレバレで、秋自身にもバレている。だが、秋にその気は全くない為、相手にされない。

「またふられたな、遠峰。」

「うるせーよ、相原。」

また、の部分を妙に強調した仁希。

稜は、秋が仁希の事を意識していると、なんとなく分かっている。そして、仁希も秋を好いていると分かっている。だから、ライバルとして互いに見ていた。

「そんな下心丸見えのお前に秋はなびかねーよ。」

「はっ お前に成瀬さんの何が分かる。相原、お前にだけは負けねえ。」

メラメラと怒りの炎を燃やす稜。仁希はクールに切り返す。

「なにも分からないさ。だが、俺だってお前に秋は譲れん！」

「この勝負どちらに勝利の女神は味方するのかねえ？今、俺は不利だが、絶対成瀬さんに振り向かせてやる！じゃあな、相原。」

自信満々な捨て台詞を残し、稜は去った。仁希は唇を噛み締め、呟く。

「あんなたらしに秋をとられてたまるかよっ」

「…なんて可愛くない態度。」

「それは恋だからよ！」

「えっ」

女子トイレで誰も居ないと確認した後、呟いた台詞だった為、秋はかなり驚く。いきなり、突っ込んできたのは、クラスメートの大和港だ。彼女は恋愛について悩みをもつ者にしか寄り付かず、悩みがあると小耳に挟んだ途端に飛んでくるといふ習性がある。

「成瀬っちは、相原っちに恋をしてるの！相原っちの事、ずっと考えてるでしょ？」

大和 港の難点。苗字に『っち』と必ずつける。かなりダサい。

「え、恋？（た、確かに仁希の事、よく考えちゃうけど）」

「そうよ！恋なのよ！相原っちも成瀬っちの事、満更じゃないと思ってるから、早く告白しちゃうなさい（きっと、相原っちも成瀬っちの事、好きよ）」

「え、そんな急に言われても。」

ビシッと言われたが、まだ自分の恋心を自覚出来ない秋は戸惑う。

「この問題だけは時間も解決してくれないの！成瀬っちが頑張らないと、相原っちが可哀想だよっ」

「仁希が、可哀想？」

港の意味深な台詞に不思議そうに首を傾げる、秋。実は彼女、もの凄く鈍感なのである。

「おっと、こっちの話。気にしないで！それより、相原っちにちゃんと自分の気持ちを伝えるの。分かった？」

「い、いきなり…？」

「じゃあ、少しの間よく考えなさい！また、会いましょ。」

戸惑う秋に、誠に勝手な約束を取り付けた港は、さっさと消える。また、恋に悩む人達の元へ向かうのだらう。今度の人は、秋がよく

知る人物だったが。

「相原つち!!」

「…大和? (何でコイツが俺の所に?)」

ゼイゼイと息をきらし、肩を大きく揺らしつつ、港は仁希の前に現れた。

「相原つちに良いお知らせをもってきたの! 早く、本命に告白しなさい!!」

ホンメイニ コクハクシロ

「なっ」

廊下のだ真ん中でそんな台詞を大声で言われた仁希。恥ずかしくて何も言えなくなっていた。

「え、大和さん、相原君の本命が誰か知っているの!??」

「ちよつと、大和さん! 誰なの!??」

港に廊下で、しかも大声で言われた為、女子に騒ぎ立てられる羽目に。

「んーそれは言えないわ。そのうち、校内一有名なカップルになるわよ。」

「いや、有名にしなくて良いって!!」

港は冗談で言ったのに、大声で否定してしまった。

本命が、大切な本命がいると言っているようなものである。

「やっぱり相原君、好きな子いるんだ。」

「私、狙ってたのに！」

「相原君の心を奪ったのは、どこの誰なの！？」

案の定、女子生徒が騒ぎ出す。仁希は、自らの失態に頭を抱えるだけ。

「さあねっそのうち分かるんじゃない？じゃ！」

「（これで秋に誤解されたら、一生恨んでやるからな、大和！！）」

「ねえ、秋！聞いた？相原君のこと。」

「仁希のこと？何それ。」

クラスの女子が秋に群がる。秋が仁希を好きだと、仁希の本命が秋だと知らずに。これが大きな嵐を巻き起こすこととなる。

「相原君に好きな子、本命がいるらしいの！」

「えー？誰かの噂じゃないの？」

「違うのよ！本人がいるっていう意味の発言してたもの。」

ちよつと固まったが、さっくり噂と切り捨てた秋。が、次の言葉は返せなかった。好きな男に本命がいる、と聞いて落ち着いていられる女は、いない。

「嘘！！あーでも、誰だか想像できるかも。」

「私もできるわ……」

その2人がチラツと秋を見る。秋は、仁希の『本命の女』が誰かについて本気で頭を悩ませていた。

他人に関しては鋭いが、自分の事に関してはとても鈍い秋が、分かるわけもないことだが。

「（仁希の本命の女って誰なの…？）」「
ここは再び女子トイレ。秋は仁希の心配通り、自分だとは思っていない。架空の女に対して、嫉妬するばかりだ。

「（はあー絶対秋の奴、誤解したよなあ…）」
ところかわって、ここは、男子トイレ。悩んでいるのは、勿論仁希。己の失言は悔やんでも悔やみきれない。

翌朝は、いつも一緒に登校している秋と仁希の姿がなかった。互いに気まづくなってしまったから。
この状態が一週間程続いた。秋も仁希も明らかに元気がない。

「成瀬っちー今日、一緒に行ってほしい所があるの。来てもらえないかな？」

普段、共に行動するなんて有り得ない秋と港。港は自分が原因を作ったのだから、解決しなければならぬと思ったのだ。

「別に良いけど、どこに行くの？」

「内緒。じゃあ、放課後よろしくね」

港は了承を得ると去っていった。残された秋は、何がなんだか分か

らず、頭を悩ませる。

「相原っち。先週はごめんなさい。私のせいでこんな風になって反省してる。今日、舞台用意したから、よろしくっ」

「はあ？」

最初はしんみりしていた港だったが、最後だけ妙に元気がいい。やはり人の恋愛話が好きなのだ。

「今日の放課後、成瀬っちをある場所に連れていくから、きめちゃいなさいよ。」

続けて告白しろと目で訴えた。仁希が返事をする前に一枚のメモだけ残して去る。そのメモには、秋を連れていく場所が書かれていた。

放課後・・・

港が秋を連れて来たのは、学校からかなり離れた公園。夕日が差し込み、ムード満点な場所である。

「え、えーとここで何を？」

「まだ内緒ー。あ、ちよつと待ってて。」

仁希の姿を確認した港が、秋を放ったらかしにして出ていってしまう。基本的にお人好しの秋は、大して気にしないのだが。

「もうっなんなのー」

流石に嫌だったようだ。

「ようっ」

ポンと頭を叩かれて見ると、そこには

「仁希！」

相原 仁希がいた。秋の悩みの種の人物である。そして、今一番会いたくない人物でもあった。

「なんでここにいるのよ。まさか？」

「俺が頼んだわけじゃないからな。大和が勝手にやったんだよ。」
「そう。」

・・・

暫し沈黙が続いた。

2人には1時間以上に感じられた、たった5分間の沈黙が。

「あ、あのさあ」

沈黙に耐えられなくなり、口を開けば同時に同じ台詞を口にする。

「秋からどうぞ？」

「いや、仁希から良いって。」

このやりとりが10回程続いた。先に折れたのは仁希で。

「ふうっ じゃあ、俺から言っぞ。」

「もちろん。どうぞ？」

どうぞ。と言われたら、何だか言いにくい。それが告白だったら尚更で。

「何よ。早く言いなさいよ。」

しびれを切らした秋に再度せかされてしまう。仁希は、それで心を決めた。

「俺、お前が好きなんだ。」

「え…？」

耳を疑うような台詞に秋は思わず聞き返す。

「だーから！俺は、秋が好きなんだって…！」

もうヤケをおこした仁希。ここで言うておかなければ、後悔すると思っただけである。

「…本当なの？」

「2回も言わせておいてその台詞はないだろ。」

真っ赤な顔がなによりの証拠。無意識のうちに、秋は自分の頬をつねり、夢でないことを確認した。

「変な顔。」

「ちよつと、そんな風に言わないでよ！」

先程までの空気が一気になくなり、いつもの2人となった。が、告白の返事は欲しい。

「秋。返事は？」

「…も…き」

「もき？意味分かんねーよ。日本語喋ってくれ。」

余裕が出てきた仁希。軽口をたたく。

秋は、もう1度同じことを口にする。但し、今度は大きな声で。

「私も好きっていったの！」

翌日からまた2人揃って登校する姿が見られた。ただ、今までとは変わり手を繋いで幸せそうにする姿だったが。

学校一の美男美女の秋と仁希。この2人がカップルとなった事に誰

も異論は唱えなかつた。
勿論、あの遠峰 稜も。

（後書き）

皆様、お久しぶりです。 &初めまして。
奈哉です。

今作は、この5月からちょこちょこ書いていたものを漸く完成させたものです。

受験勉強の合間をぬって書き進めたわりには、かなり短めです（
- ^ ;

初、恋愛に挑戦致しました。

復活後は、FFから離れ、恋愛にジャンル転向しようかとも考えている始末です。

とりあえず、3月まで勉強するので御待ちください。その後、考えてたいと思います。

では、読んで頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0233d/>

学校一の美男美女

2010年10月11日04時38分発行